

IT 端末を用いた高齢者に関する思い出誘出 コミュニケーションモデルの構築

脇山 司

吉野純一

サレジオ工業高等専門学校

1. はじめに

日本の高齢者数は全人口の 25%であり、2030 年には超高齢化社会を迎える。高齢者問題のひとつである孤独死は深刻な問題となっている[1]。高齢者の孤独死を解消するための効果的な一手段としては、高齢者が人と日々コミュニケーションができる環境で過ごすことが必要である。世代間のコミュニケーションができる施設として幼老複合施設がある。この幼老複合施設は、子供と高齢者の交流のあり方についてそれぞれの施設が模索している状態であり、各施設による交流方法の共有するための仕組みがないという課題がある[2]。そこで、容易に共有が可能な交流方法のひとつとして IT 端末を用いた高齢者と子どもとのコミュニケーションのモデルを構築することにより課題の解消をすることができると考えた。

図 1 は、世代間交流の現状とモデル構築のアプローチを示す。高齢者と子どもとのコミュニケーションモデル構築の具体的な方法は、高齢者と子どもとの交流を円滑にするためにタブレット端末を用いる。タブレット端末の援用方法は、高齢者の思い出となる写真や音楽などの表示をすることにより高齢者の思い出を回想させる。本研究のコミュニケーションのモデルは、高齢者が IT 端末を用いながら子供に思い出語りを行うこととした。思い出語りとは、高齢者の思い出を子どもに語り聞かせ、その後子どもからの質問に答えるということを想定している。思い出語りを用いた理由は、高齢者の誘出した思い出は過去の知財であり、子供に聞かせることによって子どもの知識を豊かにできると考えたからである。

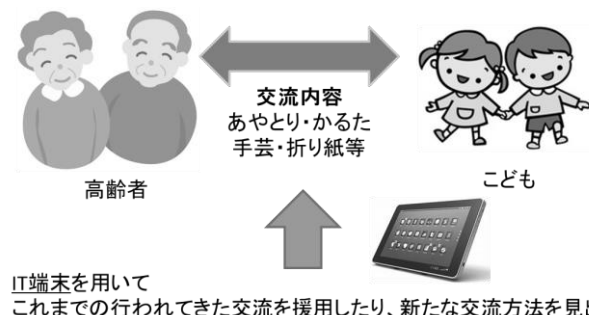


図 1. 世代間交流の現状とモデル構築のアプローチ

2. 検討内容

本研究では、IT 端末を用いた高齢者の思い出誘出に関する検討について高齢者対象のアンケート調査等を用いて分析を行った。分析のアプローチは、大きく分けて 2 つある。1 つは、IT 端末上のコミュニケーション表示モデルの作成と評価である。高齢者の思い出を誘出するためには、高齢者の思い出をどの程度記憶しているのかを知る必要がある。そこで高齢者を対象とした思い出の傾向についてのアンケート調査を行った。アンケート調査の内容を用いて IT 端末 (タブレット端末) 上でコミュニケーション表示モデル作成した。作成した表示モデルを高齢者に試用していただき、表示モデルの操作しやすさについて評価を行った。もう 1 つは、思い出誘出時の傾向の客観的データ計測と考察である。高齢者の思い出を引き出すためには、思い出しているかどうかということ客観的かつ定量的なデータで判断しなければならないと考えた。簡易脳波計を用いて計測される脳波強度から思い出誘出時の傾向を判断することはできないかと考え、計測を行った。

3. 結果

実験・アンケートから以下の 3 つの知見が得られた。

- ① 高齢者は、約 7 割の人が 10 代～30 代頃に流行した歌手を記憶している。
- ② 高齢者に IT 端末を操作させるには、ユーザビリティを特に意識して作成しなければならない。IT 端末を用いて思い出を回想させる方法は、整理された分類わけではなくイメージとして回想できるようなやり方にする必要がある。
- ③ 簡易脳波計を用いて low β 波、low γ 波、 θ 波を計測することで思い出を回想しているかどうかの傾向を把握することができると考えられる。

これらの知見は、コミュニケーションモデル構築において高齢者の思い出を回想することに必要な研究の基礎となるものと考えている。

4. 参考文献

- [1] 東京都監察医務院, 平成 14 年～平成 21 年事業概要, 52 頁
- [2] 北村安樹子, 幼老複合施設における異世代交流の取り組み(2) 「Life DesignReport (2005 年 1 月号)」